

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	超域文化学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏名	
	文学研究科超域文化学専攻 博士課程前期課程1年			森川はるか 印	
指導教員	所属・職名			氏名	
	文学研究科 ・ 教授			栗田和明 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会			個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	ラトヴィアの民俗文化・現代社会における歌・合唱				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏名	
研究期間	2010 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

「歌をもって独立したバルト三国」の一つ、ラトヴィアの現代にも残る盛んな合唱の文化を明らかにしていく。ユネスコ無形遺産に登録されている「歌と踊りの祭典」を主な事例とし、ラトヴィア語文献及び聞き取り調査等、現地でのフィールドワークをもとにしてその歴史と現代の背景について触れる。民謡と合唱のつながりや、ドイツ・ロシアに支配されてきた歴史、多民族国家として合唱の伝統をどのように行っていくかの展望を踏まえ、「何故彼らは今日まで盛んな合唱の文化を継承し、保持してきたのか」を考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ラトヴィア] [歌と踊りの祭典] [合唱]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

ラトヴィアは何故、120 万を超える民謡 (Dainas) を持ってそれを固有の文化として守り継ぎ、独立への動きとして合唱を用いたのか。またユネスコ無形遺産登録されている 5 年に一度の「歌と踊りの祭典」という国民的行事を今日まで保持していったのか。ドイツ・ロシアなどに支配を受けてきた歴史、また多民族国家となった現代での合唱の活動について、現地調査を踏まえて分析をする。なお、2010 年 6 月 20 日～7 月 17 日、2010 年 12 月 18 日～2011 年 1 月 10 日の 2 回フィールドワークを行った。

1. 「歌と踊りの祭典」に至るまでの歴史と人々と合唱

バルト・ドイツ人支配時代にキリスト教布教のために歌を用いていたことが発端とされる。この地域では人々は礼拝時の歌を通して一つの場で交流を図り、更に年中行事などで民謡を歌うことで自分達の文化を被支配時代の中で守ってきた。16 世紀に西欧で書かれたと考えられる書物に「歌の祭りがあり、年中行事における家族間での祝い・農作業の合間に歌われている」とラトヴィア・エストニア地域についての記録が残っているほど、民謡を普段から歌う習慣が浸透していたと考えられている。

この地域の人々をバルト・ドイツ人は長い間支配下に置いていたが、19 世紀にロシア帝国が農奴取り込みを行い始める。これを受けてバルト・ドイツ人達は現地の農民たちを取りこまれないようにするために目をつけたのが、歌で信仰を深め、人々が集っている現地の人々の文化であった。当時各ヨーロッパ地方で盛んに行われていた合唱祭をこの地域でも行うことで、ドイツの啓蒙主義を浸透させ、取り込みを行おうとした。

19 世紀末は田舎から都市へラトヴィア人が流出して、これにより新たなコミュニティの形成されるようになった。人々は初対面でも共通した民謡を歌い合うことで文化を共有し、コミュニティ内の交流を行ってきた。

1864 年 Dikļi (ディクリ) にてバルト・ドイツ人がラトヴィア人男声合唱団によるコンサートを行う。この時のプログラムはラトヴィア人が手掛けたものはほとんどなかった。しかしこの頃からラトヴィア人が自民族の文化について関心を向けていくようになる。これは当時の他ヨーロッパ各地域で見られた民族運動の影響があった。Krišjānis Barons がラトヴィア全国にある民謡の収集を行い、やがて Jānis Cimze がドイツ民謡の影響を受けてラトヴィア民謡の多声化を行う。教会音楽やロマン派の影響である多声音楽はより豊かな感情表現のできるメロディーになり、このアレンジにより、ラトヴィア民謡の合唱曲化が進み、収集・統一の役目を担う。民謡の多声化はコンサート用の「プロ音楽」への変容にもなり、ラトヴィア人による 1873 年第一回歌の祭典を開催するきっかけとなる。この頃ラトヴィア語の詩や文学・劇も発展し、その詞を用いた合唱曲も作曲されるようになった。これは 19 世紀末という社会変動の時代で人々のコミュニティも大きく変わっていった中で、人々同士の生きがいにもなっていった。

人々はこの歌の祭典で集い、互いに民謡の合唱を行うことで自民族のつながりを深めた。結果ロシア帝国からの独立へのまとまりにもつながった。ロシア帝国からの独立後も各地方でも小規模の歌の祭典が行われるようになり、全国的な祭典も続く。

ソ連再征服時はソ連による歌詞の検閲やスターリンを讃える歌の強要などで制限されるが、歌の祭典自体の禁止はなされなかった。この背景に共産党の芸術振興の推奨などが挙げられるが、合唱団を作り人々をまとめる目論みもあったと推測されている。「ソビエトラトヴィア」としての記念日に結びつけて共産主義を広め、支配力の強化も図っていた。

この頃の祭典は多数の合唱団が参加するようになっていたことや、ソ連による芸術振興推進により、技術の高い祭典へと変容していく。合唱だけでなく 1965 年から「踊りの祭典」も加わり、この頃からオーディション制が導入され、「プロ音楽」としての祭典となるが、逆説的にこれがラトヴィア音楽の発展に結びついていった。ソ連の支配があったからこそ、レベルの高い歌の祭典・ラトヴィア音楽の発展になったことが大きい。更にこの祭典で集い歌を歌い合うことで自民族のアイデンティティの確認や文化の共有などがなされていった。結果的には 1990 年の独立回復への気運の高まりにもなっていった。

ナチス・ドイツの侵攻やソ連再征服を受けて国外へ亡命していったラトヴィア人も多くいた。北米やオーストラリア、他ヨーロッパ諸国などで人々はそれぞれ集い、コミュニティでの「歌の日」「歌の祭典」を開催してラトヴィア本土で行っていた歌の祭典と同じような形式と文化を保っていった。しかしラトヴィア本土で行われていたほど頻繁ではなく、亡命コミュニティにいた作曲家たちによる合唱曲やキリスト教音楽といった、民謡以外のものが多く歌われていた。

研究成果の概要 つづき

独立回復後は亡命コミュニティのラトヴィア人や、海外からのゲストを交えて行われている。ソ連によって長く禁じられていた国歌を歌ったり、ポピュラー音楽に近い形態で合唱がなされるようになっている。

2. 「学生歌と踊りの祭典」 次世代教育と国家統合

2010年7月6日から12日にかけて「学生歌と踊りの祭典」がラトヴィアの首都リーガで行われた。

学生(小学～高校生)の歌と踊りの祭典は1960年から始められている。1948年から子供達と学生による歌のステージは設けられていたが、次世代を担う学生たちが主体となるコンサートを行うことで「互いを知り合い、日頃の成果を発表し合う場」として独立した形で行われるようになる。これも本祭との間に行われ、5年に一度ペースで開催されている。

本祭では民謡や伝統音楽、民族舞踊などを主としているが、学生版ではコンテンポラリーダンスや創作合唱といった、伝統に縛られない自由な発表の場となっている。また学校単位でオーディションで選ばれて出場し、ラトヴィア人以外の民族の参加も見られる。教育の場としての祭典の位置づけが大きく、音楽家や学校の先生たちが主体で動く。

学生の歌と踊りの祭典の主催は国の教育部門センター(教育省)で、昨夏のフィールドワークで実行委員長の Agra Bērziņa 女史に直接インタビューを行った。伝統も大切にしながら今日ラトヴィアの人々の多様性を認め合う場としてラトヴィアに住む全学生に平等な機会を与え、更にラトヴィア社会における人々の「統合」の方向も意識しているとのことであった。

また、最後の歌のコンサート後に聴衆と演奏者側と一緒に歌い合う非公式コンサートが近年の傾向にあり、聞いているだけ・発表しているだけのコンサートから共に音楽を分かち合う場になっている。

バルト三国の大学生による Gaudeamus という歌と踊りの祭典があり、各国持ち回りで開催している。Gaudeamus 自体はソ連時代から行われており、当初このコンサートがラジオ放映された時はそれまでの歌の祭典の位置づけを、変えていったとも言われている。そなわちその場へ行かなくても人々の身近な所になったという。

2011年リトアニア開催で Gaudeamus は行われるが、大学生による発表の場で、共通の歌を歌うこともあればそれぞれの国の発表に留めることもあり、三国間の協調と理解を試みるためのものである。

3. 夏至祭などの伝統的な行事や、日々の生活を通しての合唱活動について

毎年6月23日から24日にかけて夜通しで人々は夏至祭を行う。バルト三国共通の行事であるが、ラトヴィアが一番盛大に行う。人々は田舎の親戚や友人のもとに集う。この時24日がヤーニスという男性の日であることからヤーニスという名前の人の所で人々は夏至祭を祝う。夏至祭では伝統的な民族衣装を着て野外で火を焚き、ご馳走やビールを飲食しながら歌を歌って過ごす。踊ったりゲームをしたりすることでも、初対面の人々同士仲良くなる。夏至祭にちなむ「リーゴ」の歌を歌い合うが、これもラトヴィア特有の合唱の文化ともいえる。この歌は毎年こうして行われる夏至祭を通して代々歌い継がれていく。ラトヴィア人の文化としてとても大切にされており、歌が盛んになっていった文化の背景の要因にも挙げられる。

学校の部活動や授業で参加を義務付けられている、あるいは民間のサークル単位で合唱団が多く編成されているが、独立回復後の合唱活動は徐々に変わってきている。若い世代の合唱離れや、多民族国家ラトヴィアにおいて一つの歌を歌う難しさも出てきた。小学生くらいでは民謡や合唱が身近であっても、中学以降は接する機会が減っていく傾向がある。独立回復の1990年を境に、合唱の意味合いが大きく変わり、歌の祭典の役目も変容し続けている。現在多民族国家ラトヴィアが抱える民族問題が大きいのが、今後歌の祭典が「社会統合」と「伝統文化の保持」とどのように変わっていくか、注目されている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④学会発表、レポート報告

・2010年10月16日 於 早稲田大学
バルト・スカンジナビア研究会にて研究発表
「Kas to Rīgu dimdināj'? —ラトヴィアの合唱文化をめぐって—」

・日本ラトビア音楽協会のホームページにてラトヴィアでのフィールドワーク報告を、5回に渡ってレポートとして報告。ラトヴィアの伝統文化や現在の様子、2010年に行われた「学生歌と踊りの祭典」の研究報告を公表した。

日本ラトビア音楽協会 <http://www.jlv-musica.net/latnews/index.php>